



東洋英和女学院

# 史料室だより No.99

2022.11.6 発行  
東洋英和女学院  
史料室委員会



## ★ 東洋英和女学校卒業記念写真 1910（明治43）年 〈宮崎家所蔵〉

1900（明治33）年竣工の木造校舎を背景に、前列は校長ミス・ブラックモアを中心に宣教師と日本人の先生がたが並びます。二列目は高等科卒業生、その後ろには本科卒業生が並んでいます。三列目右端には柳原燐子（柳原白蓮）<sup>あきこ</sup>、同列左端には安中はな（村岡花子）が写っています。二人が共に東洋英和女学校で学んだことを伝える貴重な写真です。

## ★ 目次

特集1 親族に語り継がれる柳原白蓮 —武田 資子氏インタビュー—	2
〈資料紹介〉41 柳原白蓮ゆかりの染め帯	6
特集2 「村岡花子記念講座」を振り返る	
—多彩な側面を見せた講座の足跡—	7
展示案内／長野彌先生のエピソード募集	11
〈東洋英和の先生がた〉9 G.E. キュックリヒ先生	
支えられた保育者—東洋英和へのメッセージ— 菅原 陽子	12
利用統計／史料室の活動より（2022年4月～2022年9月）	14



朝夕の祈りと歌に育ちたる我魂よ神ともにあれ

(『東洋英和女学院七十年誌』「母校創立七十年」宮崎白蓮)

村岡花子と同時代に東洋英和で学んだ歌人柳原白蓮は、のちに母校に思いを寄せこの歌を詠んだ。白蓮の波乱に満ちた前半生の中でも、東洋英和での日々は「最も幸せなとき」であったという。祈りと歌と共にある学び舎での日常は、後半生における家庭生活や社会活動、また白蓮自身の精神の充実に大きな影響を与えたと考えられる。この特集では、親族によって語られる、白蓮と家族の物語を紹介する。



故 宮崎蓀苳氏の遺影 (右) とともに。右から武田資子氏、神藤真理教諭

柳原白蓮に始まる宮崎家と東洋英和とのつながりは、曾孫である武田(旧姓 宮崎) 資子氏に受け継がれている。2022年8月、史料室委員が東京・西池袋の宮崎家を訪問し、資子氏にご家族について語っていただいた。インタビュアーはかつて資子氏を教えた神藤真理教諭(中高部国語科・史料室委員)。

#### 【宮崎家と東洋英和】

神藤真理教諭(以下神藤) 東洋英和への資子さんの入学はどのような経緯でお決めになったのですか。  
武田資子氏(以下資子) 私が英和に入学したのは、祖母 蓀苳の強い希望によるものでした。祖母自身は、祖母の父(宮崎龍介)が「女の子が都会に通学するのはよくない」という考えを持っていたそうで、郊外の別の学校に通っていました。また、祖母の2人の子ともである私の父(宮崎黄石)と叔父は男だったので、宮崎家にとって久しぶりの女の子である私に対して、祖母は特別の思い入れがあり、是非とも英和に通わせたいと思っていたようです。

神藤 白蓮の母校で学んだことについてはどのようにお感じになっていますか。

資子 英和には小学部から大学まで通いました。白蓮は「英和在学中が人生で最も幸せな時期だった」と語っていたようで、ここで「私も同じです」と言

えればいいのですが、さすがに私は白蓮ほど波瀾万丈な半生を過ごしてきた訳ではないので、そこまで言うとは嘘っぽく聞こえてしまうかもしれません(笑)。ただ、英和在学中に、私は生涯の友人たちに出会うことができました。英和で過ごした日々は、間違いなく今の私そのものを形作っていると思います。勉強は正直あまり得意ではなかったので、そういう側面で在学中に得られたものは、残念ながら多くはないかもしれませんが(笑)。

神藤 白蓮の曾孫という立場を意識するのはどんな時でしょうか。

資子 小さい頃から、祖母や父から折に触れて白蓮の話の聞いたり、白蓮ゆかりの地(蓼科など)を訪ねたりした際に、ぼんやりと自分の曾祖母(白蓮)は有名な人だったんだなあ、と感じることはありましたが、白蓮について初めてはっきり意識したのは、おそらく中学時代、林真理子さんが『白蓮れん』を執筆された際のことだと思います。当時、林さんが私の家に訪ねて来られたり、取材旅行で蓼科にご一緒したりした際に、「あなたのひいお祖母様はとっても美しく強い女性だったのよ」といったことを聞いて、子どもながらに白蓮という人物に関心を持つようになりました。あとは、何と言っても「花子とアン」の放映時ですね。あの頃は、会う人会

う人に「花子とアン、見てますよ」と声をかけていただきましたし、当時、私の夫の職場の飲み会でも「え、蓮子って、奥さんのひいお祖母さんがモデルなの!？」とひとしきり話題になったりしていたようです。

**神藤** 「花子とアン」放映中、白蓮が駆け落ちするシーンが放映された時、資子さんは、身内としては複雑な思いもありますと、私にお話しになりました。あの時、それ以上は聞かなかったのですが、白蓮の人生、生き方についてはどのように受け止めていらっしゃるんですか。

**資子** あの時、神藤先生に「複雑な思いもあります」とお話ししたのは、あのシーンが全国放送されることで、白蓮について、ややもするとセンセーショナルな印象が強調されて世の中に広まってしまうかな、と感じていたからです。でも、今にして思えば、「花子とアン」では全編を通して、白蓮という人物について、非常に丁寧な描き方をしていただきました。また、何と言っても、「蓮子」を演じられた仲間由紀恵さんが素晴らしかったと思います。私を含め、家族は皆、「花子とアン」がとても気に入っています。


白蓮の生き方についてですが、私は、自分で申し上げるのも何ですが、祖母をはじめ家族や友達にも

恵まれ、これまで特に大きな逆境に見舞われることもなく、半生を過ごしてきました。白蓮が遭遇したであろう数々の逆境を、仮に私が経験することがあったとして、そのうちの一つでも、白蓮と同じ選択、決断をすることができるかと問われると、正直、とてもそんな自信はないですね。


**【娘・宮崎落苳氏から見た東洋英和白蓮】**

**神藤** 落苳様は、あなたの在学中、あなたを通して英和を大切になさっていたと私は感じています。例えば高二の作家論の取材で、あなたと2人で岩手まで宮澤賢治の取材に行ったり、と。落苳様にとってお母様である白蓮の母校はどのようなものであったと思われますか。


**資子** 祖母にとって、白蓮という存在は、物語の主人公になるような人物というよりも、「自分(祖母)のことを、苦労しながらも懸命に、愛情深く育て上げてくれた母親」だったのだらうと思います。そんな苦労の絶えなかった母親が、「最も幸せだった」と言っていた英和は、祖母自身にとっても特別な存在であったに違いありません。だからこそ、私を英和に入学させることに、祖母は並々ならぬ情熱を傾



**柳原白蓮 (やなぎわら・びやくれん 1885-1967)**  
 本名 宮崎 (旧姓 柳原) 燐子。華族出身で大正天皇の従姉妹にあたる。15歳の頃結婚、出産、離婚を経て1908年より1910年まで東洋英和女学校在籍。卒業後伊藤伝右衛門と見合いし約10年の結婚生活ののち出奔(いわゆる「白蓮事件」)、社会運動家宮崎滔天の長男宮崎龍介と結婚。1男1女を授かるも、長男香織は1945年8月11日に戦死。戦後「悲母の会」を創設し反戦運動を始める。最期まで長女落苳氏とその家族と共に東京・西池袋の家に暮らした。

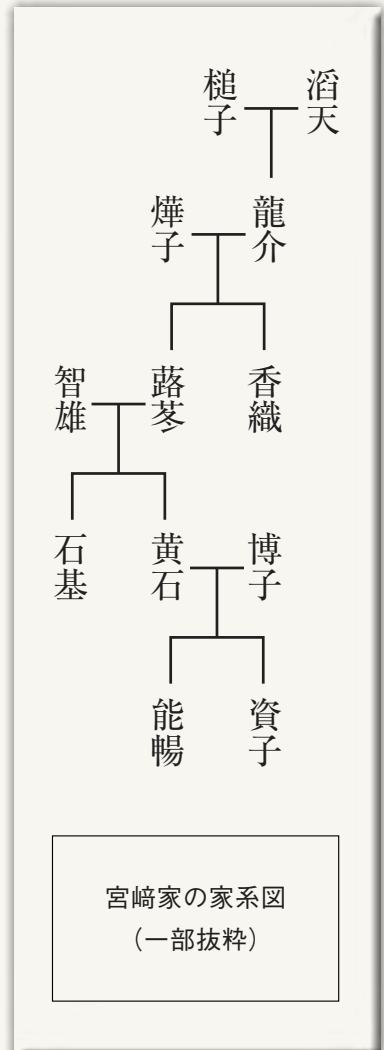


**宮崎落苳 (みやざき・ふき 1925-2022)**  
 宮崎龍介と白蓮の長女。今年1月に逝去するまで、母の創設した短歌結社「ことたま」を主宰。また「滔天会」を設立し、日本と中国の民間交流に尽力した。華道山村御流名誉華務職。おもな著作・監修に『白蓮 娘が語る母 燐子』(旧伊藤伝右衛門邸の保存を願う会)『娘が語る 白蓮』(河出書房新社)『柳原白蓮の生涯 愛に生きた歌人』(同)がある。



**宮崎黄石 (みやざき・こうせき) 氏 (写真右)**  
 宮崎落苳氏長男、白蓮の孫。白蓮とは二十歳頃まで西池袋の家で共に暮らしていた。現在、白蓮ゆかりの品々の管理は黄石氏に委ねられている。

**武田資子 (たけだ・もとこ) 氏 (写真左)**  
 旧姓 宮崎。宮崎黄石氏長女、白蓮の曾孫。1996年東洋英和女学院高等部、2000年東洋英和女学院大学卒業。



けていたのでしょう。ちなみに、私が英和に合格したという知らせを聞いて、祖母は感激のあまり「目から血が出た」そうです（笑）。

**神藤** 落莖様は、母白蓮は、英和在学中が最も幸せな時であったと言っておりましたとおっしゃっています。私がいただいたお手紙にもそう記されていました。落莖様から、白蓮の英和での思い出など、お聴きになったことはありますか。また、それはどのような内容でしょうか。

**資子** 「花子とアン」放映当時、白蓮と村岡花子さんの交友について、祖母が話してくれたことがあります。実家からも疎遠にされ孤独だった白蓮にとって、いかに村岡さんが「腹心の友」として、心の支えになってくれたかという話でした。ドラマさながらに、お互いを「燐さま」「花ちゃん」と呼び合っていたのよ、と話していた時の祖母の嬉しそうな表情は、今でもはっきりと覚えています。

### 【曾孫・武田資子氏から見た白蓮】

**神藤** 今後、白蓮の曾孫としての資子さんのビジョンはありますか。

**資子** 申し上げたとおり、私自身は、白蓮とは似ても似つかない、よく言えば穏やかな、有り体に言えば平凡な半生を過ごしてきました。そんな私に「ビジョン」といった大げさなものはありませんが、あえて言えば、私の家系が白蓮につながっていることによって生まれた様々な「ご縁」を、私の代、そして私の子どもや孫の代まで、大切にしていけることが、私にできることであり、また、なすべきことなのだろうと思います。

あと、私の実家には、おびたしい数の白蓮やその夫・宮崎龍介ゆかりの品々が保管されており、その管理は今私の父が行っているのですが、いずれその役割も私たちの世代が担うことになると思います。

あまりに数が多すぎて、どう管理していいのか見当が付きませんが…。

**神藤** あまり白蓮の歌は読んでいないと以前伺っていますが、もしあれば好きな白蓮の歌とその理由



1957年6月27日 60歳以上の同窓会（前列右から2人目が村岡花子、4人目が柳原白蓮）

をお聞かせください。

**資子** 恥ずかしながら、教養の浅い私にとって和歌は敷居が高く、白蓮の歌もそれほど知らないのですが、その中では、

「花と花 うす紫と くれなると うなづきあふは 何のこころぞ」

という歌が気に入っています。

この歌は、いわゆる「白蓮事件」の頃に詠まれたものと聞いています。ふと目に入った二つの色違いの花を見て、おそらく自分（白蓮）と恋人（龍介）に重ね合わせ、「うなづきあふは何のこころぞ」と詠む。恋をした誰もが経験するであろう、切なくやるせない想い、その普遍性に共感を覚えます。

**神藤** 東洋英和の基督教教育は白蓮に影響を与えたと言われていますが、どう思われますか。

**資子** おっしゃるとおり、英和の「敬神奉仕」の精神は、白蓮にも影響を与えたのではないのでしょうか。最初の離婚を経て、実家に戻ることもできなかった白蓮にとって、英和での生活は「居場所」そのものだったと思います。おそらくそれまで、自分の行く末すら分からない、追い詰められた状態であった白蓮にとって、「神」であるとか、「他人に奉仕する」といった発想を持つ余裕はなかったのではないかと思います。英和で友人たちに囲まれ、心の安らぎを得た白蓮は、「敬神奉仕」の精神に深く共鳴したに違いありません。

これは私の推測ですが、白蓮と龍介が結婚した後、宮崎家に多くの苦学生などを住ませたり、戦後に世界平和のための活動を積極的に行ったりしたのは、「他者への愛」が白蓮の根底にあったことが大きく影響しているのではないかと思います。

**神藤** 村岡花子さんとの友情をどのように考えますか。

**資子** 白蓮が村岡花子さんに宛てた手紙を見ると、誰も信じることができないような絶望的な孤独の中で、いかに村岡さんが白蓮にとって、希望の光になってくださったかがよく分かります。「兄弟や身内など何もなりはしませぬ 本当の心を知って下さる友ほど有難いものはない」「どんな場合にもあなたと私は『燐さま』と『花ちゃん』ですから、どうぞどこまでも一緒に行き度いと思ひます」。まさかの時の友こそ真の友、という言葉がありますが、その言葉が、これほどまでに真に迫って響くことも、そうはないのではないのでしょうか。

### 【宮崎家と『白蓮れんれん』】

**神藤** 林真理子さんの描かれた白蓮像をどのように受け止められましたか。

**資子** 林さんの描かれた白蓮は、綿密な取材に裏付けられ、なおかつ、男女の恋愛にまつわる数々の作品を手がけてこられた林さんならではの感性で、史

実にも増してドラマチックかつ情熱的なものとなっていると思います。白蓮が実際に生き抜いた歴史的事実というものは客観的に存在する一方、例えば『白蓮れんれん』や「花子とアン」には、それぞれに白蓮や彼女を取り巻く人々の描き方があるわけで、事実をどのように解釈した上で作品として形にするか、そこには、それぞれの作り手の方々のセンスや感性が反映されていて、とても興味深いですね。

**神藤** 林さんとは、とても良い関係を築いていらっしゃると思います。執筆の際、資子さんは林さんの取材を受けられました。その時のことを教えてください。

**資子** 当時、林さんとは、ご飯をご一緒したり、蓼科に取材旅行に行ったり、中学生だった私は「資子ちゃん」と可愛がっていただきました。蓼科旅行では、夜と一緒に花火をしたのですが、その時のことを題材に、夏休みの作文を手伝っていただいたこともあります（笑）。普段は賞など取ることのない私の作文がその時ばかりは入賞したので、学校の先生がたにはバレていたかもしれませんが…（笑）。幸いにも、林さんとはその後もお付き合いを続けさせていただき、お見合いのお相手を紹介していただいたりもしました。残念ながら、紹介していただいた方ではないのですが（笑）、林さんには、私の結婚式にもご出席いただきました。作文のエピソードは、その時の林さんのご祝辞にも登場するのですが、20年も前のエピソードを覚えてくださっていたことに、私も祖母も感激していました。

**神藤** 最後に、2006年 辛亥革命95周年にあたり、お祖母様やお父様と中国を訪問されたそうですが、その旅で特に心に残ったことがあれば教えてください。

**資子** 中国には、辛亥革命〇周年や孫文生誕〇周年といった節目に、宮崎家をご招待をいただいています。私も2006年を含め何度か、祖母と父と一緒に中国へ行きました。私にとって高祖父に当たる宮崎滔天（孫文ら中国の革命家たちを支援した社会運動家）が孫文の活動を支援したのは、100年以上前のことですが、私が中国を訪問するたびに感じることは、迎えてくださる中国側の関係者の方々の「温かさ」です。

5年ほど前には、祖母から私の子どもまでの4世代で招待をいただいたことがありました。私の下の子どもは当時まだ0歳で、そのくらいの年齢の子ども

を連れて海外旅行はとにかく大変、というのが普通ですが、私たちをアテンドしてくださった方々は、子どもたちを自分の孫や子どものように可愛がってくださり、とても快適に過ごすことができました。

中国には、「水を飲む人は、井戸を掘った人の恩を忘れない」ということわざがあるそうです。私たち日本側の関係者も、100年以上前にできた「ご縁」を大切にしていかなければ、と思います。

**資子氏へのインタビュー終了ののち、宮崎黄石氏もご同席くださり歓談の時間をもった。**

**神藤** 黄石さんは特に白蓮さんに可愛がられたと伺っています。

**宮崎黄石氏**（以下黄石） 白蓮の長男（落莖の兄）である香織が終戦直前に戦没し、その1年余り後に私が生まれたので、さながら香織の生まれ変わりである私に、祖母（白蓮）は特別な思いがあったようです。よく祖母は幼い私をおぶって近所を歩いていたのですが、周囲からは「あの白蓮さんが赤ん坊をおぶっている」と驚きの目で見られていたそうです。

**神藤** 偉大な歴史を持つご家族はドラマや小説と史実が異なるなど、ご家族としては複雑ではありませんか。

**黄石** 白蓮はどういう人だったかとよく聞かれますが、一言で申し上げれば、家庭内では「普通のおばあさん」でした。一緒に暮らしていた身内だからこそ、質問する側の期待に沿うようなお答えをすることが、むしろ難しいという部分もあります。ただ、テレビや小説では、作り手さんの思いや感性もあるので、事実から離れ過ぎず、また第三者の方々に迷惑がかからない範囲で、自由に解釈していただくことは構わないと思っています。白蓮を題材にした作品の制作に当たっては、当然、私たちも可能な限りのご協力をさせていただいていますが、今申し上げたような意味では、あまり私たちが作品の内容自体に関わらない方がいいのだろうと思います。

他にも黄石氏には、ご出身である都立小石川高校（当時）の初代校長伊藤長七先生（かつて東洋英和にも在職。表紙画像三列目左端）のお話や、白蓮の晩年のお話などを、ざっくばらんにお聞かせいただいた。宮崎家には、過去から脈々と続く、人々を受け入れ温かく包み込むような空気が流れていた。

取材／編集

神藤 真理（中高部国語科教諭・史料室委員）  
松本 郁子（法人事務局史料室・史料室委員）  
三笠 知世（法人事務局史料室・史料室委員）



（左）宮崎家の表札。「ことたま会」「滔天会」の木札もかかっている。  
（右）白蓮の愛した人形「みどり丸」

## 〈資料紹介〉41 柳原白蓮ゆかりの染め帯

東洋英和の卒業生であり歌人の柳原白蓮の資料は、多くが宮崎家（特集1参照）に保管されており、当史料室では古書店等から集めた関連書籍や関連記事が収集されているのに留まっている。その中で、このたび卒業生のご厚意により白蓮ゆかりの品をご寄贈いただいたので、紹介したい。

### 意外な経由でのご寄贈

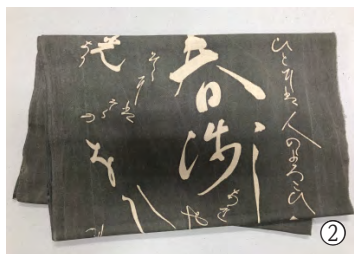
東洋英和の卒業生の中でも、一般に広く知られている柳原白蓮であるが、残念ながら当史料室にはモノ資料などの関連史料が皆無に等しかった。

そうしたところ、中高部からの紹介で、卒業生であり元中高部教諭、現在は渋谷教育学園渋谷高等学校校長の高際伊都子<sup>たかぎわい つこ</sup>氏が寄贈品をお持ちとのことで、2021年10月に史料室スタッフがお会いする機会を得た。高際先生が携えてきたのは、白蓮の文字が染め抜かれた帯であった（写真①）。

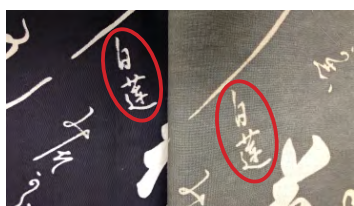
この帯の旧蔵者は高際先生ではなく、先生の学校の美術教諭であった藤貫喜由子<sup>ふじぬき きよこ</sup>先生である。藤貫先生が間もなく定年退職するという時期に、高際先生にこの帯が委ね



①



②



「白蓮」と染め抜かれている。

られた。高際先生より、白蓮の母校である英和で必要ならばお届けしますとお申し出があり、当史料室で受贈する運びとなった。

この帯は、白蓮本人も使用したらしく、白蓮のお弟子さんが形見分けにいただいたものを、さらにご友人の藤貫先生が受け継いだという。芯の入った名古屋帯で、身体が細かった白蓮の帯だったためか、帯の尺は短く仕立てられ

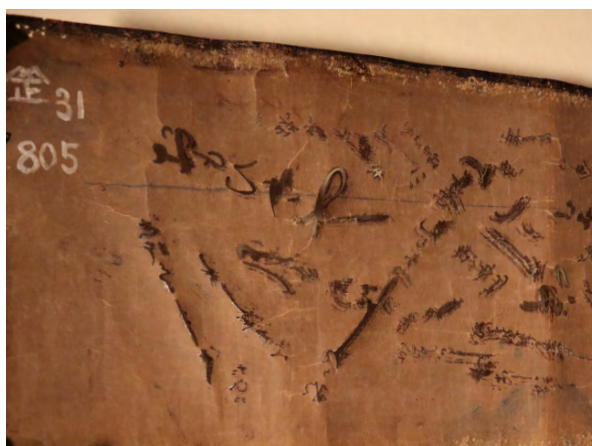
ていた。

貴重な品を頂戴し喜んでいたところ、さらに2022年4月にも同じく藤貫先生より高際先生経由で、別仕様の白蓮の文字の染め帯をご寄贈いただいた（写真②）。今回は芯なしの褪せた深緑色の帯を頂戴した。よく見ると文字は前回の帯と重なっており、同じ型紙から作られたものであることがわかる。自在に配置された文字の合間には、小さく「白蓮」の名前も読み取れる。

誌面をお借りして、藤貫先生と寄贈をご仲介してくださった高際先生に感謝申し上げたい。

### 宮崎家に残されていた型紙から

特集1の取材のため宮崎家を訪問した際に、ご寄贈いただいた二本の帯を持参したところ、宮崎黄石氏より「見覚えがある」と、筒に入った型紙を収蔵庫より出して見せてくださった。合わせてみると、残念ながら帯の文字とは同じではなかったが、流麗な白蓮の墨跡を型紙に起こし、その型紙から帯や浴衣、風呂敷や手ぬぐいを染めて、歌会の同人や知人にお配りすることがあったという。この帯もまた白蓮に師事する弟子たちへの、白蓮からの心尽くしの品だったのだろう。（史料室）



柿渋紙に白蓮の墨跡を刻み、紗を掛け、漆で固定した型紙。この型紙から染め物が製作された。（宮崎家所蔵）

## 「村岡花子記念講座」を振り返る —多彩な側面を見せた講座の足跡—



2022年2月27日の最終講座で講演する山形政昭先生



山形先生を囲んで、村岡家、港区麻布地区総合支所、学院メンバーとの記念撮影

2016年度に施行され、翌2017年度から本格的に始動した「村岡花子記念講座」は、東洋英和の卒業生であり、翻訳家・児童文学者としてだけでなく、教育や評論活動などにおいて幅広く活躍した村岡花子の業績に着目し、関連する各界の講師をお招きして開催されてきた。コロナ禍で中止を余儀なくされる時期も経て企画・運営されたが、2021年度の講座をもって終了となった。今回の特集では、6年次にわたる「村岡花子記念講座」の実績とその成果をたどりたい。

### 記念講座の発案と地域連携事業への展開

「村岡花子記念講座」の発案者は、池田明史東洋英和女学院大学前学長である。「史料室だより」No.88には、村岡花子の生涯をモデルとした2014年NHK朝の連続テレビ小説「花子とアン」を視聴し、「敬神奉仕」という東洋英和のスクールモットーの人格化された具体的存在として、本学学生たちの「ロールモデル」に村岡花子を据えることが最適ではないかと思いついた経緯が書かれている。村岡花子は、翻訳家・児童文学者・歌人・教育者・編集者・放送作家・社会活動家等々と多彩な顔を持つ人物であることから、多様な視角からの講座設定が可能であり、本学の4つの学科（人間科学・保育子ども・国際社会・国際コミュニケーション）の学びと連動させた記念講座の企画が始まった。

当初、「かくして2017年度より現行カリキュラムのフレッシュマンセミナー枠を活用した必修単位としての記念講座の開設に漕ぎ着けた。2019年度以降の新カリキュラムでは、この講座は独立した枠組みの上に立つことになる。」「『村岡花子記念講座』は、毎年5回程度を六本木校地で一般公開事業として展開する方向で設計しており」と池田前学長が述べているように、一般公開と並行して、学生が受講するためにカリキュラムの中に組み込まれる予定であった。ところが、多人数の学生の校地移動などの課題

のためか、記念講座そのものは学生の必修単位の講義とはならず、2017年度以降は生涯学習センター、大学改革推進課、法人事務局史料室が企画運営を担当する一般公開講座となっていった。

しかし、記念講座の目指した自校史・女性史教育という要素については、2017年度以降の大学フレッシュマンセミナーに史料室担当の「自校史」授業の1コマが新たに加わった。さらには大学の2019年カリキュラムの中に「東洋英和の歴史」が全学共通科目の選択必修科目として開設、2022年度から開講され、本学学生の学びに向けて展開されることで、かたちをかえて継続されたといえる。

また、2016年8月に東洋英和女学院は港区と、「互いに有する資源を活用し、地域社会及び学術研究の発展に寄与するため」の連携・協力に関する基本協定を締結した。締結式には港区からは武井雅昭区長、小柳津明副区長、東洋英和からは深町正信院長、吾妻國年副院長、池田明史学長（※役職は当時）が出席し、地域振興や国際交流の分野での連携が合意された。それを受けて、同年10月以降に開催された「村岡花子記念講座」開設企画セミナーは、港区との最初の連携事業となった。以後、記念講座は、本学の教授陣や外部研究者などにご登壇いただき、村岡花子の業績と各人の専門分野をリンクさせながら学術的な講演やシンポジウムを広く一般に公開し

ていく方向性で固まっていった。

### 村岡美枝氏、恵理氏による講座の企画・運営協力

村岡花子の令孫であり、翻訳家である村岡美枝氏、作家である村岡恵理氏のお二人は、村岡花子のコレクションを「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」として自宅で公開し、村岡花子の知的資源を保管し、世間に広く伝えるための活動を続けられてきた。村岡恵理氏の作品『アンのゆりかご 村岡花子の生涯』が、NHK連続テレビ小説「花子とアン」の原案となり、「花子とアン」の大ブームが巻き起こることで、村岡花子の一般的認知度は高まった。長年にわたるご親族による村岡花子の資料収集と整理、広報活動、研究の蓄積があればこそその結果であった。

「村岡花子記念講座」においても、村岡花子の多彩な活動を掘り下げ、講座内容と連動させながら企画を検討していく際に、村岡家のお二人の知見は不可欠であった。そのため最初の講座の企画段階からご協力をいただくことになり、毎年度企画の段階からご参加くださり、恵理氏には複数回、講座へご登壇いただいた。

さらに、村岡花子を通じてのお二人の人脈の広さは、講座企画の大きな柱となった。たとえば2017年度の梶原由佳氏（モンゴメリ研究者／トロント公共図書館勤務）、2018年度の佐佐木幸綱氏（歌人／講座時には現代歌人協会理事長）、三枝昂之氏（歌人／宮中歌会始選者）、2019年度の中川李枝子氏（絵本作家、『ぐりとぐら』の作者）、小川琢磨氏（広岡浅子についてご講演。講座時には大同生命保険株式会社執行役員）など、各専門分野の一流の講師をお招きすることが可能だったのは、ひとえに村岡家のご尽力による。誌面をもって心より感謝申し上げたい。

### 港区麻布地区総合支所との協働

前述したように、港区と東洋英和女学院の連携事業として「村岡花子記念講座」が開催されていたため、地元の港区麻布地区総合支所の職員の方がたにもたくさんのご協力をいただいた。事前には、港区民をはじめとする周辺関係者への広報、参加募集にもご尽力いただき、講座当日は会場設営や受付などもご担当いただいた。

2019年度の芹野与幸氏の講座「建築家W.M.ヴォーリズと東洋英和女学院」の際には、麻布地区総合支所発行で、麻布地域の方がたが取材・編集する地域情報誌「ザ・AZABU」のスタッフが講座を

取材された。そして、「ザ・AZABU」No.51の「みんなの社会科見学」のコーナーで大変詳しく講座内容を紹介していただいた。港区にもいくつかのヴォーリズ建築が現存するため、麻布の地域性・歴史性と記念講座の内容が連動し、連携事業ならではの企画となった。港区麻布地区総合支所の職員、関係者の方がたにも心より感謝申し上げたい。

### 各界の一流講師と教員が連携した講座内容

村岡家や港区からの協力を受けての「村岡花子記念講座」であったが、本学の教員もそれぞれの専門分野を活かすかたちで多数名が講座に登壇し、適宜他学の研究者も交えながら、村岡花子や東洋英和についての見識を深めていくことができた。講座の内容については10頁の一覧をご参照いただきたい。

初年度の2016年度には「日本の近代化とキリスト教学校～女子教育の歴史にみる東洋英和～」という全体テーマで、加納孝代氏（講座時には活水女子大学学長）を迎え、村上陽一郎本学元学長をはじめとする教授陣が講演やパネルディスカッションを行った。村岡花子を育んだ東洋英和の教育の根本にあるキリスト教教育、婦人宣教師、女子教育について、大きな歴史的視点から再考していく機会となった。

2017年度には「カナダと日本をつなぐ英語教育と文学の世界」をテーマに、モンゴメリ研究者である梶原由佳氏をカナダからお招きし、モンゴメリが『赤毛のアン』を書くに至る背景や児童文学書について2回にわたりご講演いただいた。本学教員はキリスト教と英米文学、開学当時のカナダの国情、東洋英和の英語教育についてなど、多層的にテーマを展開させ、カナダの婦人宣教師の創設による東洋英和という学校の国際的な知のポテンシャルを示した。

2018年度には「村岡花子没後50年記念」として、短歌界の泰斗である佐佐木幸綱氏、三枝昂之氏にご登壇いただいた。両氏には、あまり取り上げられてこなかった村岡花子と短歌という視点からお話いただき、花子と同じ佐佐木信綱門下だった柳原白蓮、片山廣子についても語っていただいた。当時の佐藤智美大学副学長は、給費生（現在の奨学生にあたる）だった村岡花子から着想された本学人間科学科の特別奨学生制度である「花子プロジェクト」（詳しくは「史料室だより」No.88、2頁参照）の導入と実施経過について紹介し、本講座は貧困が広がりつつある日本社会において東洋英和が果たしていくべき社会的役割について提言する機会となった。

2019年度には「東洋英和女学院創立135周年・大学開学30周年記念事業」という講座の位置づけのもと、さまざまな分野からの外部講演者をお招きすることになった。筑波大学の溝上智恵子教授からは戦時下のカナダの日系人強制収容所における東洋英和の婦人宣教師の教育支援活動について、中川李枝子氏には児童文学と村岡花子について、芹野与幸氏には東洋英和の旧校舎の設計者であるW.M.ヴォーリズについて、小川琢磨氏には村岡花子に大きな影響を与えた広岡浅子についてご講演いただいた。

### 展示コーナーとの連動、史料室の果たした役割

学院では、2014年度の「花子とアン」ブームの折に、村岡家の「村岡花子文庫」を引き継ぎ、およそ2,000冊にわたる蔵書を受贈している。それを受けて、蔵書の保管とともに社会に広くコレクションを公開し活用していくため、本部・大学院棟の展示コーナーの拡張が行われた。2015年4月には村岡花子文庫展示コーナーが新設され、全国からの村岡花子ファンをふくめた多くの見学者を迎える場所となっている。この展示コーナーでは2016年度の「村岡花子記念講座」開設企画セミナーにともない、講座の紹介展示を行うことを皮切りに、村岡家と史料室とで「村岡花子記念講座」の講演に関連したテーマの展示企画を検討し、設営を行った。2018年10月からは「村岡花子と短歌創作—花子の名訳の源泉をたどる—」、2019年10月からは「村岡花子と『家庭文学』—大人も子どもも共に楽しむ作品を創る—」、2020年5月からは「村岡花子からたどる東洋英和の英語教育」などの企画展が講演時期に合わせて展示され、講座理解の一助としていった。

史料室では2017年度以外は、企画の段階から「村岡花子記念講座」の運営に関わり、2016年度と、2018年度に史料室スタッフが講座も担当した。特に2016年第2回の講演「史料室所蔵資料にみる女学生の日常」は貴重な学院の画像資料を駆使し、東洋英和の歴史を生き活きと伝える内容で好評を博し、前述したように翌2017年度の大学のフレッシュマンセミナーでの自校史教育につながっていった。

### コロナ禍による講座の中断と再開

小川琢磨氏の講座が開催された2020年2月には、徐々に新型コロナウイルス感染拡大への危惧が高まり、実施の可否が検討される事態となった。さまざまな情報が交錯する中で、可能な限りの消毒・換気

対策を徹底することで講座は敢行された。

続く2020年度の秋には、山形政昭大阪芸術大学名誉教授と鳥飼玖美子立教大学名誉教授による2つの講演が予定されていたものの、緊急事態宣言が頻発され、深刻化していく新型コロナウイルス感染拡大を鑑み、記念講座は開催中止となった。

そして、2021年になってもコロナは収束の気配を見せなかったが、2022年2月にやっと前年に講演がかなわなかった山形政昭名誉教授に「ヴォーリズの学校—そのキャンパス・デザインに込めたもの—」と題して、ヴォーリズ建築の魅力の源泉について、専門的視点からご講演いただいた。

### 「村岡花子記念講座」の成果と今後

こうして振り返ってみると、記念講座では各年度、各講座ごとに多岐にわたるテーマが取り上げられたが、「村岡花子」との関わりを共通のお題に据えることによって、東洋英和で開催する講座ならではの特性が引き出されていたことは特筆に値する。それは、最初に意図されていたように、村岡花子という人物の多領域にわたる活動実績があればこそだったろう。

また、連続講座として開催されることで、各テーマ間に新たな関連性と新たな視点が生じ、村岡花子をめぐる講座が、決して懐古趣味や東洋英和関係者内での自己言及的な内容に留まらず、現代性や普遍性を帯びて幅広く展開されたことも大きな成果だった。そのため、多くの地域住民の方がたがりपीターとなり、この講座を心待ちにしてくださっていたのだと推察される。

さらに、一般公開講座という場を通じて、学院が地域社会と共に自らの社会的貢献について熟考する機会を与えられた意義も大きかった。

村岡花子の生涯は、東洋英和でのキリスト教教育によって生まれ、社会の中で自分が果たすべき使命を常に志向する、「敬神奉仕」の精神に裏打ちされたものだった。東洋英和という学校の教育が結実した村岡花子という人物の業績を改めて検証・考察することは、学院の原点、現状、未来を見つめ直すことにもつながっていく。諸般の事情により「村岡花子記念講座」は休止となったが、「村岡花子記念講座」がもたらした豊かな芽をいかに発展させていくかが、これからの課題であろう。

(史料室)

## 「村岡花子記念講座」講座一覧(2016～2021年度) ※敬称略。肩書・役職は講演当時

### 2016年度「村岡花子記念講座」開設企画セミナー

日本の近代化とキリスト教学校 ～女子教育の歴史にみる東洋英和～

- 第1回 2016年10月15日  
〈基調講演・パネルディスカッション〉  
(創立130周年記念 第3回教育シンポジウムと併せて開催)  
「女子教育とミッションスクール」  
基調講演(1)「基督教と学校教育」  
村上 陽一郎(東洋英和女学院大学前学長)  
基調講演(2)「婦人宣教師と日本の女子教育」  
加納 孝代(活水女子大学学長)  
パネルディスカッション  
村上 陽一郎(東洋英和女学院大学前学長)  
加納 孝代(活水女子大学学長)  
池田 明史(東洋英和女学院大学学長)  
(モデレーター) 泉 恵理子(高等部卒業生/「日経  
ビジネスアソシエ」編集長)
- 第2回 2016年10月29日  
「史料室所蔵資料にみる女学生の日常」  
酒井 ふみよ(東洋英和女学院法人事務局史料室)
- 第3回 2016年11月19日  
「三人の女性から日本の近代を読む」  
与那覇 恵子(東洋英和女学院大学教授)
- 第4回 2017年1月21日  
「ミッションスクールと帝国海軍  
—日本の近代化を支えた女性たち—」  
池田 明史(東洋英和女学院大学学長)
- 第5回 2017年1月28日  
〈基調講演・パネルディスカッション〉  
「これからの社会とキリスト教学校」  
基調講演(1)「女子教育の社会的・宗教的意義」  
深町 正信(東洋英和女学院院長)  
基調講演(2)「宣教師から花子へ、そこに学びつつ  
ある心の妹たちへ」  
村岡 恵理(作家)  
基調講演(3)「キリスト教学校の作法とエートス」  
深井 智朗(東洋英和女学院大学教授/学院宗教部長)  
パネルディスカッション  
深井 智朗(東洋英和女学院大学教授/学院宗教部長)  
村岡 恵理(作家)  
池田 明史(東洋英和女学院大学学長)  
(モデレーター) 笹崎 里菜(大学卒業生・日本テレビ  
アナウンサー)

### 2017年度 カナダと日本をつなぐ英語教育と文学の世界

- 第1回 2017年10月14日  
「カナダと日本をつなぐ『赤毛のアン』  
～作者L.M.モンゴメリの旅路～」  
梶原 由佳(モンゴメリ研究者/トロント公共図書館  
勤務)
- 第2回 2017年10月28日  
「L.M.モンゴメリの愛読書  
～ヴィクトリア時代の児童書を中心に～」  
梶原 由佳(モンゴメリ研究者/トロント公共図書館  
勤務)
- 第3回 2017年11月18日  
「生きる勇氣—花子とバージニア・リー・バートン—」

深井 智朗(東洋英和女学院副院長/東洋英和女学院  
大学教授)

- 第4回 2017年12月2日  
「開学の歴史的背景」  
島 創平(東洋英和女学院大学教授)
- 第5回 2017年12月9日  
「東洋英和の英語教育—異文化間理解能力の育成」  
笹島 茂(東洋英和女学院大学教授)

### 2018年度 村岡花子没後50年記念

- 第1回 2018年10月13日  
「短歌・佐佐木信綱門下と『心の花』  
—花子と白蓮、片山廣子がいた時代—」  
佐佐木 幸綱(歌人/「心の花」主宰・編集長/現代  
歌人協会理事長)  
(聞き手) 村岡 恵理(作家)
- 第2回 2018年10月27日  
「村岡花子と短歌—記録短歌の魅力—」  
三枝 昂之(歌人/宮中歌会始選者/山梨県立文学館  
館長)
- 第3回 2018年11月17日  
「村岡花子と東京婦人会館  
—時代に先がけた女性のための文化施設—」  
松本 郁子(東洋英和女学院法人事務局史料室)
- 第4回 2018年12月8日  
「人間科学科 花子プロジェクトをはじめて  
—養護施設の子どもに大学教育を—」  
佐藤 智美(東洋英和女学院大学副学長/東洋英和  
女学院大学教授)  
(聞き手) 村岡 恵理(作家)

### 2019年度 東洋英和女学院創立135周年・ 大学開学30周年記念事業

- 第1回 2019年11月16日  
「カナダの日系人強制収容所における東洋英和宣教師の  
教育支援活動について」  
溝上 智恵子(筑波大学図書館情報メディア系系長/  
筑波大学教授)
- 第2回 2019年12月7日  
「本・子ども・絵本」  
中川 李枝子(作家/『ぐりとぐら』シリーズなどの  
子どもの本の著者)
- 第3回 2019年12月14日  
「建築家 W.M.ヴォーリズと東洋英和女学院」  
芹野 与幸(一粒社ヴォーリズ建築事務所顧問/近江  
兄弟社嘱託研究員)
- 第4回 2020年2月22日  
「日本の近代を全力で駆け抜けた颯爽たる女性 広岡浅子」  
小川 琢磨(大同生命保険株式会社執行役員)

### 2020年度 ※新型コロナウイルス感染症の影響により中止

### 2021年度 教育の未来を考える

- 第1回 2022年2月27日  
「ヴォーリズの学校  
—そのキャンパス・デザインに込めたもの—」  
山形 政昭(大阪芸術大学名誉教授)

## 村岡花子文庫展示コーナーご案内

### 企画展 邦訳『赤毛のアン』70周年

#### 村岡花子と「赤毛のアンをめぐる人々」

東洋英和の卒業生であり、翻訳家・児童文学作家として知られる村岡花子が翻訳した『赤毛のアン』が刊行されてから、2022年は70年になります。『赤毛のアン』は、日本の戦後復興期に多くの女性たちを魅了しベストセラーとなり、その後続くアン・シリーズもふくめ、いまだに読み継がれている作品です。

今回の展示では70年の間に刊行されたさまざまな『赤毛のアン』を紹介するとともに、村岡花子と「赤毛のアンをめぐる人々」との交流を紹介していきます。

#### 〈村岡花子文庫展示コーナー企画展会期〉

2023年7月29日（土）まで



#### 【学院資料・村岡花子文庫展示コーナー】

入場料：無料 どなたでもご自由にご覧いただけます。／展示場所：東洋英和女学院 六本木校地本部・大学院棟 1階 / 公開時間：日曜日・祝日・長期休暇以外の9：00～20：00（土曜日は9：00～19：00）  
※館内の洗面室はご使用いただけません。／団体でのご見学の場合は、予めお知らせください。

### —次号「史料室だより」No.100 特集に向けて—

## 長野彌先生のエピソードを募集いたします

1977年に創刊した「史料室だより」は、次号で100号を迎えます。記念すべき号では、長年にわたり院長や理事長を務められた長野彌先生の特集を予定しております。

つきましては同窓生の皆様から長野先生のエピソードを募集し、ご紹介していきたいと思っております。

長野先生のエピソードや思い出についてお手紙やメールでお知らせください。

【宛先】東洋英和女学院史料室  
〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40  
E-mail [archive@toyoeiwa.ac.jp](mailto:archive@toyoeiwa.ac.jp)

【応募締め切り】2023年1月末  
※差出人様のお名前、ご住所、電話番号も付記願います。  
※「史料室だより」に掲載される場合に、匿名をご希望の場合はその旨お伝えください。



## 〈東洋英和の先生がた〉9 G.E. キュックリヒ先生



### 支えられた保育者

#### —東洋英和へのメッセージ—

##### 教育宣教師として日本へ

「久しぶりに懐かしい私のホームの一部である東洋英和に帰ることができまして、大変うれしく思っています。」

カセットテープから聞こえてくる声は、ゲルトルート・エリザベート・キュックリヒ先生の声である。キュックリヒ先生が亡くなられ40年以上経つが、近年、先生の東洋英和での講義テープと主著である『學齡前に於ける宗教々育』が東洋英和で収集され、その内容から学ぶ機会を与えられている。

キュックリヒ先生はドイツの幼稚園教諭養成校においてフレーベル教育を学び、さらに幼稚園教諭養成の上級教諭の国家資格を取得後、アメリカの福音教会から日本に教育宣教師として派遣されたのである。東洋英和女学校幼稚園師範科や草苑高等保育学校、和泉短期大学などの保育者養成に携わり、鐘ヶ淵子供の家や戦災孤児の家「愛泉寮」の設立、キリスト教保育連盟設立時の支援など日本の幼児教育、および福祉において様々な功績を残している。（「史料室だより」No.73 思い出の先生がた18「神と人と日本に献げた生涯」前掲）

##### 短期大学保育専攻科の特別講義

1972年12月1日と書かれたカセットテープには、キュックリヒ先生が特別講義のために来校され、卒業間近の学生たちに語られたメッセージが録音されている。

当時、先生は74歳。これから保育者になる学生たちにとって、先生の保育者としての50年の経験と信仰を通して学ぶ貴重な講義である。先生は子どもの頃に母親を亡くし、将来母になりたかったこと、将来を誓い合った婚約者を第一次世界大戦で失ったことを語られる。そして「もし、私はその時に、主イエス・キリストの御救いによって、キリストの思想、キリストの救いに生きておるクリスチャンでなかったならば、私は今度こそ、もう、希望、なかつ

ただろうと思います。自分もたぶん死にたかったでしょう、また、死んだかもわかりません。死んだだろうと私は思っております。私にはあの人生のどん底の中から、私を、私に頭を出ささせてくださった力は私の信仰であったと、そう覚えてください。」と力強い言葉で学生たちに語り掛けられる。聞く者は皆、先生の献身的な愛の奉仕の源にこのような経験と信仰があったことを深く思うのである。

この講義では、キュックリヒ先生がこれから保育者になる東洋英和の学生に二つのお願いをしている。一つは、子どもをよく見る、子どもからよく学ぶ先生になることである。先生自身が母親のいないことで寂しい、辛い経験をしたことにより、子どもの心をその表情、態度からセンス、フィーリングを持ってよく読み取り、スキンシップと共に子どもが安定した人間関係を築けるようにすることが大切であると語られる。

二つ目は子育て中の「お母さんたちの友」になることである。多くの困難な家庭を見てこられた先生は、園長先生が行う説教のような、研究のようなお話の母の会を行うのではなく、子どもの担任の若い、お母さんと同じくらいの年齢の先生が、真の理解者として孤独の中にお母さんたちの友となることの必要を説かれるのである。

さらに、キュックリヒ先生はキリスト教保育の中心は希望であると力強く語られる。これから保育者として働いていく中で、自分の弱いところを克服する方法を研究しなければならない。希望があれば、また使命感があれば、必ず自分の弱気に勝利できる方法が与えられてくるのだと学生たちを励ましたのである。

##### 『學齡前に於ける宗教々育』

キュックリヒ先生の主著となる『學齡前に於ける宗教々育』は、1932年から1934年の冊子「基督教宗教々育講座」の中に掲載された論考をまとめたも

のである。この書は全国の私立大学図書館、国立国会図書館にも6巻全て揃っておらず、近年、古書店より1から5巻を東洋英和女学院大学大学院図書館で収集した。第4巻はコピー資料となる。第6巻は現在も未入手である。

この中で、キュックリヒ先生は基督教の園で働く保育者や教会学校教師に、幼児期が人生における最も重要な時期であり、宗教教育も発達を踏まえた特別の教育方法が必要であることを示されている。

キュックリヒ先生は、幼児期の宗教の教育は集団教育における宗教の話や形式を重んじるのではなく、小さなグループや個人的教育が望ましいとする。そして、その教育は、子どもが質問をすることや経験すること、感覚を通して理解することの出来る宗教的、または敬虔と呼ばれるすべてのものを通して行うことであるとされる。先生は子どもが心の中に宗教に対する愛と神に対する信頼を創造するために、保育者の宗教的な雰囲気や子どもが自然に触れる経験、本、絵画、歌、音楽から感性を育むことを意識的に備えることが重要であると説かれている。

キュックリヒ先生の宗教教育はフレーベルの思想を受け継ぐものであり、フレーベルの著書『人の教育』にあるように、子どもと親や身近な人との共同感情は真実の宗教心の最初の芽生えであり、最初の発端であるという、幼児期の子どもの環境とそれが宗教教育に及ぼす感化の重要性を説くものである。キュックリヒ先生はドイツで学んだフレーベルの思想を日本において、この時代においてどのように生かすべきかと問い続けながら、保育者養成と保育に努められたのである。

### 現代の私たちへのメッセージ

当時の卒業生たちは先生の教えを胸に子どもの真の幸せのために尽力された。そしてその働きは今日の基督教保育に確かに引き継がれているのである。

近年見つけ出されたキュックリヒ先生の講義テープと著書は、現代の東洋英和の学生たちと卒業生たちに届いた先生からのメッセージなのだろう。私たちには神さまの力強い支えがある。これからもどんなに困難に感じるがあってもこの支えと東洋英和での学びがあれば大丈夫だと、先生は今も私たちに励まし続けてくださっているのである。

### 【引用・参考文献】

- ・森田弘道『1998年キュックリヒ生誕100年記念 G.E. キュックリヒの生涯』社会福祉法人愛の泉、1998年
- ・Jetter, Reinhild Bettina (2002): *Gertrud Kücklich. Japan-Missionarin der Evangelischen Gemeinschaft: Ein Beitrag zur interkulturellen Bedeutung christlicher Missionsarbeit anhand ihrer Berichte von 1922 bis 1975.* Stuttgart: Medienwerk der Evangelisch-methodistischen Kirche.
- ・ゲルトルド・キュックリヒ「基督教宗教々育講座」第1、2、3、6、8輯、『學齡前に於ける宗教々育』基督教出版社、1932-1934年
- ・小原國芳／莊司雅子監修『フレーベル全集 第二巻 人の教育』玉川大学出版部、1976年

### 【カセットテープ史料】(愛の泉所蔵)

- ・G.E. キュックリヒ『支えられた保育者』東洋英和女学院短期大学保育専攻科 特別講義、1972年12月1日

※この記事の一部は日本基督教教育学会 第34回学会大会(2022年5月28日)で発表したものである。

菅原 陽子(東洋英和幼稚園教諭・史料室委員)

### ゲルトルト・エリザベート・キュックリヒ (Gertrud Elisabeth Kücklich) 先生 一略 歴一

1897年12月25日	ドイツ・シュトゥットガルト市生まれ ペスタロッチ・フレーベルハウス、福音教会フレーベルセミナーで学ぶ
1921年	幼稚園教諭養成上級教諭の国家資格取得
1922年	アメリカ・オハイオ州の福音教会本部で、宣教師としての訓練を受ける。アメリカ福音教会より派遣されて来日。向島教会及び鐘ヶ淵幼稚園に配属
1925年	東京保育女学校設立(後に東洋英和に合併)。保育者養成を始める
1937-1950年	東洋英和女学校幼稚園師範科専任教員、のち短期大学保育科教授
1945-1976年	戦災孤児の家「愛泉寮」開設に加わり、以後「愛の泉」の中心的役割を担う
1976年1月2日	東京にて召天(78歳)

## 利用統計 (2022年4月～2022年9月)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月
展示見学者数		52	72	57	52	34	63
展示見学者区分	学内関係者	20	19	30	8	5	14
	一般	32	53	27	44	29	49
		4月	5月	6月	7月	8月	9月
資料閲覧者数(累計)		5	4	3	6	4	5
閲覧者区分	本学学生・生徒			1			
	現教職員	2	1		3	2	1
	旧教職員						
	同窓生・学院関係者	1	1	1		2	4
	同窓生(研究者)		1				
	他校研究者・学生	2	1		1		
	一般			1	2		
利用の目的	年史編集	1			1	1	
	著述・論文作成	2	2	1	3		
	伝記資料調査			1		1	2
	記録類の調査・研究	2	1	1	1	1	
	学院広報関係		1		1	1	2
	その他						2
資料の種類(重複あり)	東洋英和関係	4	4	3	4	4	5
	カナダの教会関係	2	1		1		
	村岡花子関係	1		1	1		
	周辺地域史				1		1
	その他	1	1		1		
		4月	5月	6月	7月	8月	9月
月別レファレンス件数		14	16	11	9	12	19
質問者の区分	本学学生・生徒			2			
	現教職員	7	6	3	2	3	5
	旧教職員	1			2	2	2
	同窓生・学院関係者	1	1	1	4		5
	同窓生(研究者)		1		1		
	外部研究者・学生		5	2		1	
	外部研究機関						1
	一般	5	3	3		6	6
質問内容(重複あり)	資料所蔵調査	7	6	4	3	6	9
	写真所蔵調査	2	5	3		1	1
	事項調査	7	7	5	3	7	10
	その他	4	3	1	3	2	3

## 史料室の活動より (2022年4月～2022年9月)

(☆は複数回)

### 2022年4月

- ☆「史料室だより」No.98編集
- ☆140年史に向けた年表データ作成、各種データ一覧作成(酒井・谷川)
- ☆かえで幼稚園と史料室で「保育だより」の欠号分をコピーして相互で補充。大学図書館にもご協力いただく
- ・新任者オリエンテーションにて学院沿革説明(松本)
- ☆140年史編集委員会スタートのための準備
- ・撮影協力ー講談社『赤毛のアン』邦訳70周年記念版広報のため、展示コーナーで村岡美枝氏を撮影
- ・照会ー中高部よりEDCができた年について→戦前の校友会組織の時代には英語劇部はない
- ☆来室／調査ー他校研究者。保育関係資料
- ☆大学「東洋英和の歴史」講義について、担当教員と史料室で協議(史料室は講義を3回担当)
- ☆12日 第1回140年史編集委員会(以後、一月一回のペースで協議を行う)
- ☆照会ー文筆家より、卒業生の岡上淑子氏(1945年高等女学科卒。コラージュ作家)に関して、戦時下の英語教育、制服、勤労動員などについて
- ・校正ー昭文社『Woman's STYLE 100《日本編》』のうち村岡花子の項
- ・来室／調査ー中高部教員。野尻のリーダーズキャンプの年代特定、参加メンバーについて
- ・22日 第3回カートメルセンター検討委員会(松本、席席)
- ・撮影協力ー白泉社月刊「MOE」掲載のため展示コーナーにて村岡花子関連資料を撮影。画像も複数提供

- ・来室／撮影ー村岡恵理氏。カナダのモンゴメリ学会の発表のため、村岡花子関連資料を撮影

### 2022年5月

- ☆年史編集関連ー『120年史』資料編、年表の構成要素を分析、140年史に向けて検討。他校資料調査
- ・「史料室だより」No.98発行、発送
- ・カナダより桜プロジェクトの満開写真がメールで届く→学内関係部署、桜プロジェクトツアー参加者と共有、HPトピックスにも掲載
- ☆照会ー元山梨英和学院中・高等学校英語科教員の後藤哲夫氏より『日本での百年 1873-1973』掲載予定の宣教師画像について。関連資料も提供
- ・元本学図書館司書鷺谷由美氏より「短期大学図書館員勉強会 講読文献リスト」をお借りし複写
- ・校正ー2021年度大学卒業アルバムのうち学院の沿革ページ
- ・校正ー白泉社「MOE」7月号赤毛のアン特集記事
- ・来室／調査ー中高部教員。おもに2000年前後の卒業生の活躍について(HP卒業生ページ作成のため)
- ・見学／懇談ー桜美林学園ご一同。展示コーナー、史料室見学後、資料整理について等情報交換
- ・見学ー立教女学院資料室室長の佐野新生氏が展示コーナーを見学し、展示の運営等についてご質問あり
- ・校正ー大学で執筆の「だいがくのたから」(『大学時報』2022年9月号掲載予定。大学図書館所蔵の*Anne of Green Gables*についてのコラム)
- ・来室ー亀井佑子氏(元中高部教員。現愛国学園短期大学特任教授)。野尻の貴重な写真などお持ちいただき、現教員

も交え、解説をしていただく

- ・照会—上田保母伝習所の特定の建物はあるのかについて→『保育者養成の歩み』(16頁・17頁)等によると、宣教師館と伝習所と寄宿舎は同じ建物で、梅花幼稚園のみ別棟だった。上田保母伝習所は独立した建物を持たず、宣教師館のパーラーを教室としていた

#### 2022年6月

- ☆来室／調査—学外研究者(佐佐木信綱研究会)。村岡花子文庫を中心に調査
- ・研修—全国大学史資料協議会東日本部会2022年度総会にオンライン参加(松本・三笠)
- ・照会—高等部長より、音楽関係で活躍している卒業生について
- ・来訪—展示コーナーに港区麻布未来写真館ご担当者。今後、中高部や大学の写真部と連携して写真展示などを企画
- ・来室／調査—高等部生。三校交歓会や麻布学園との交流の歴史について、「東洋英和新聞」「かえで」を閲覧
- ・面談—出版文化社と今年度の資料整理計画について
- ・照会—ミス・ハミルトン・メモリアル基金の始まりと経過について、母の会資料を基にまとめる
- ☆大学フレッシュマンセミナー「自校史」講義(担当:松本13日3限、23日2・3限)
- ・平体由美本学教授より「2020年度東洋英和女学院大学オンライン授業対応報告書」受領
- ☆大学「東洋英和の歴史」講義のうち第8~10回(担当:松本第9回は展示コーナー、史料室の見学)
- ・17日 第1回 史料室委員会
- ・受領—佐々木肇氏(元職員)より、『カナダ婦人宣教師物語』の目録データ
- ・受領—中高部生徒会より「EIWA TIMES」バックナンバーのデータ
- ・来室—中高部国語科教員。中2の授業で戦時中の学校について伝えるため、「史料室だより」No.75、76を使用

#### 2022年7月

- ☆各部HPチェック、各種資料ファイリング
- ☆資料整理—中高部聖書科からの移管資料
- ・照会—村岡美枝氏より、新潮社の青い鳥文庫アン・シリーズの最終巻である『アンをめぐる人々』13章「デイビッド・ベルの悩み」の福音伝道師について→元小学部長山本香織先生よりご教示をいただく
- ☆資料提供—140年史編纂のため、各部担当者に史料室酒井・谷川が作成している年表データ(案)を配布
- ☆地下2階書庫、3階収蔵庫の整理、資料移動。古い食器類などを整理
- ☆資料整理—小学部資料
- ・照会—松岡裕子氏より、こどもさんびか「小さい子供がねむるとき」の歌詞について
- ☆来室／調査—学外研究者。カナダの教会関係、ミス・ブラックモア資料
- ☆校正—後藤哲夫氏訳『日本での百年 1873-1973』(カナダ・メソジスト教会、カナダ合同教会の歴史)入稿前原稿
- ・打ち合わせ—村岡美枝氏、恵理氏と次回村岡花子文庫展示コーナー企画展示について
- ・打ち合わせ—出版文化社と目録の資料分類の見直し
- ☆村岡花子文庫展示コーナー企画展示準備
- ・出張—17日に旧ハミルトン&ハード軽井沢コテージ(国の登録有形文化財)を、同窓会役員、同窓生、史料室スタッフで3年ぶりに清掃奉仕
- ・梶田マリ氏より大学図書館蔵書内に旧梅花幼稚園等所蔵の保育書があることをご教示いただく
- ・照会—総務課職員より、佐野きみ(「赤い靴」のモデル)と永坂孤女院について。「楓園」で紹介予定
- ☆資料整理—寄贈楽譜資料の酸性紙対策とファイリング
- ・来室／閲覧—幼稚園長。過去の移管資料の確認
- ・来室—細川恒子氏(元東光会会長)。「ハミルトン先生を送る歌」についてご教示いただく。中3の時に合同音楽で練習し、引退・帰国する壇上のハミルトン先生をお送りするため1回のみの演奏だった
- ☆「史料室だより」No.99執筆・編集

#### 2022年8月

- ・照会—学外研究者へ、雑誌「ケルビム」に関する阿部光子からの村岡花子宛書簡を紹介
- ☆照会—文筆家より、制服とフランセについて→小学部「ぎんなんだより」No.77,78ほかを紹介
- ・照会—大学教員より本学のチャペルの成り立ちについて
- ・来室／調査—加藤牧菜氏。合唱コンクールの課題曲などについて
- ・来室／調査—幼稚園教員。年史編纂のため2015年前後の保育記録
- ・取材—「史料室だより」No.99特集のため宮崎資子氏(卒業生、柳原白蓮曾孫)インタビュー。(神藤真理史料室委員に史料室松本・三笠同行)
- ・校正—「楓美」No.28
- ☆来室／調査—東光会役員。動画作成のための画像検索
- ☆照会—NHK札幌拠点放送局より、昭和初期に活躍した北海道出身の作家「辻村もと子」と村岡花子の交流について→村岡花子文庫には1冊辻村氏著作の所蔵あり。書簡については村岡家に照会
- ・見学案内—カナダ大使館スタッフが展示コーナーを見学。カナダについての情報をご教示いただく

#### 2022年9月

- ・校正—大学の来年度「学生手帳」のうち歴史ページ、年表
- ・照会—卒業生より、桜プロジェクトによるカナダでの桜の植樹場所について→オンタリオ州ハミルトン市ダングスとソールド市
- ☆来室／調査—東光会役員。東光会のついで用動画編集のための画像収集
- ☆資料整理—「村岡花子記念講座」関係資料、中高部校舎建築関連資料、過去の「史料室だより」編集関連資料、音楽関係資料、全院協議会史料。1960年代の本校来訪者のサイン帳も発見(シュバイツァーのご息女や大塚久雄のサイン有り)
- ・照会—村岡恵理氏より、ブラックモアの60の英文の典拠について。『百年史』『敬和会』を紹介
- ・来室／打ち合わせ／調査—大学野田潤先生。来年度「東洋英和の歴史」授業進行について。柳原白蓮関連資料も調査
- ・9日 第2回 史料室委員会
- ・照会—旧ハミルトン&ハード軽井沢コテージオーナーより、軽井沢に別荘のあったA.R.タムソン宣教師について
- ・照会—NHK知財センターアーカイブズ部より、戦争中の日本ニュース第121号に写っている女性は村岡花子か?→史料室、村岡家で別人と判断
- ・校正—日本ファイリング機関誌「Better Storage」のうち「偉人にであう」④村岡花子の記事
- ・22日 カートメルセンター検討委員会(松本、9月から委員に)
- ・来室／寄贈—千葉市立郷土博物館 外山信司氏。津田仙閣関連資料ほかご寄贈いただく
- ・校正—「東洋英和女学院説教集 第5号」扉絵解説
- ・来室／閲覧—吉本直子氏。卒業生HP作成のため調査
- ・来校—前駐カナダ大使川村泰久氏。展示コーナーを案内(松本)

#### 【おもな移管資料】

- ・中高部英語科より、古い教科書と視聴覚資料多数
- ・中高部より、ダンス部部室にあった8ミリビデオ(段ボール1箱)中高部の重要な行事記録が多く含まれる
- ・中高部より、「研究発表」(昭和54年度)4冊、(昭和55年度)3冊。1995年頃撮影の中高部活動の写真

#### 【おもな受贈資料】

- ・中高部教員北崎勝彦氏より、各種行事写真多数
- ・中高部父親有志の会より、DVD「東洋英和女学院ハンドベル同窓会2021」2枚
- ・中高部母の会より第48回楓祭のタオル(2枚)、校章マークのコースター(4枚)
- ・校章入りの筒に入った卒業証書4枚(中学部、高等部、短大英文科、英文専攻科)
- ・中高部教員町島由美子氏より、野尻学荘時代に使った手ぬぐい、しおり「かきがっこう 1ねん おいわけりょう」(1965年)、小学部で使用「X'MAS CAROLS」、「楓園祭」

- ポスター (1970年10月17日 中高部母の会主催)、「楓祭」ポスター (1971年5月4・5日)
- 元中高部教員高橋 (三代川) 温子氏より、創立70周年関連資料 (1954学校案内、70周年記念基督教講演会お知らせ、行事御案内、記念式プログラム、クリスマス礼拝プログラム)、80周年関連資料 (航空写真絵はがき、音楽会プログラム、記念式プログラム、入場券、ペナント2種、小旗)、90周年記念式プログラムほか
  - 大正、昭和初期の頃の学校図 (コピー)、昭和3年頃の応援歌の歌詞についてのメモ、「思ひ出の記 大正昭和初期の頃」(百年史準備委員会に提出した思い出の記の原稿) ほか。いずれも堀内穂子氏 (昭和4年卒) 旧蔵
  - 村岡家より、若草文庫『赤毛のアン』表紙原画油絵/石川希衣子氏 (石川達三氏ご息女) 旧蔵『赤毛のアン』感想文応募関係資料/ミス・ハミルトンより村岡花子へ送られたプリンスエドワード島関係資料 (はがきなど複数)
  - 幼稚園教員菅原陽子氏より、1972年12月1日キョックリヒ先生講演録音テープの音声データと書き起こし文
  - 創立50周年記念品 (ペーパーナイフ、東光会記念品、キーホルダー)、保育部会30周年記念品 (ペンダントトップ2点)、(所属部不明) 二拾五年記念品 (帯留)、えんじ校章入り丸型チャーム大小2点
  - 昭和17年度「児童名簿」(コピー) 東洋永和女学校附属初等学校、「東洋英和幼稚園住居所録」1994年
  - 村岡家より、辻村もと子から村岡花子宛書簡、1通
  - LPレコード「小学部の思い出」(昭和56年度卒業記念)、「道しるべ」(1979年小学部3年2組文集)、夏期学校しおり (1981年小学部6年)、「英和文芸」第28、30号
- (書籍・雑誌・論文)
- ※「楓園」第94号「史料室レター」での呼びかけに対し、『東洋英和女学校五十年史』『東洋英和女学院百年史』『青楓寮』などの記念史を複数の方がたよりご寄贈いただきました。ご協力をありがとうございます。
- 山本香織前小学部長より、「新建築」1954年12月号/「建築文化」1954年12月号/「国際建築」1954年11月号 (いずれの建築雑誌も大江宏設計の小学部校舎を紹介)
  - 大田区郷土博物館より、『馬込文士村ガイドブック』2022年 (第4刷)
  - 港区より『港区史 近代』上下巻、2022年 (校正協力)
  - 鈴木保美氏より、「図書館とともだち・鎌倉」おしらせ No.212 (2022・3・30)/「米山梅吉記念館館報」2022春号、vol.39 (いずれも卒業生、間島愛子についての記載あり)
  - 池田裕子氏 (関西学院学院史編纂室) より、「関西学院のエス

- プリ C.J.L.ベーツ」[関西学院のエスプリ J.C.C.ニュートン]
- 桜美林学園より、『桜美林学園100年史 図録編』(2022年)/桜美林大学「博物館学芸員課程年報」2021年度 第23号
- 「野尻基金支援の会News Letter」No.19
- 『Woman's STYLE 100《日本編》』昭文社、2022年 (画像提供、編集協力)
- 原口嘉代子氏 (佐佐木信綱研究会) より、「佐佐木信綱研究」第11号 (原口嘉代子「信綱と原家の人々」所収)、第12号 (原口嘉代子「西郷春子歌集『塔』」所収)
- 白泉社 MOE編集部より、「MOE」2022年7月号 (特集：翻訳70周年 今、もう一度読みたい『赤毛のアン』) 所収。画像提供、編集協力)
- 根本正顕彰会編纂委員会『根本正伝』根本正顕彰会、2008年 (根本正は禁煙・禁酒運動に尽力)
- ウォルター・ワンゲリン著/仲村明子 (1971年短期大学英文科卒) 訳『小説「聖書」使徒行伝』
- 聖学院大学田澤薫教授より、田澤薫「興望館セツルメント最初の十年における保育事業の模索」『東京社会福祉史研究』第16号、2022年5月 (調査協力)
- 「KARUIZAWA VINETTE」2022 vol.131 (ヴォーリズ建築特集) /鳥飼玖美子「アポロ11号月面着陸から英語教育へ」所収、『公研』公益産業研究調査会、No.671、2019年7月号/塚本哲也「思い出は生きる力」所収、『文藝春秋 特別版「ああ、結婚！ おお、夫婦！」』文藝春秋、2007年/「一貫校激戦時代 最高の授業 東洋英和女学院中・高」所収、『読売ウイークリー』2006年7/2号/「東洋英和女学院 花子とアン 女性が生き抜く知恵」所収、『女性自身』2014年5月13・20日合併号ほか
- 虹の会会報誌「Niji」No.10 特別号
- 短期大学英文専攻科の教科書 (ラテン語) ほか

#### 【おもな画像提供】

- 楓美会HP用に、歴史画像を約50点
- 大学教員に「東洋英和の歴史」講義のため、宣教師の画像複数
- 後藤哲夫氏訳『日本での百年』のために、宣教師の画像等27点
- 東光会動画作成のため、学校生活の画像約40点
- テレビ朝日「東京サイト」馬込文士村特集番組のため、村岡花子の画像3点
- カナダ大使館へ広報のため、展示関連画像5点
- NHK札幌拠点放送局に、辻村もと子から村岡花子宛書簡画像、村岡花子画像の2点
- 高等部長へ創立記念日の式辞のため、ミス・クレイグ関連画像23点

#### 🌸 「史料室だより」 定期講読のご案内

「史料室だより」は年2回(5月と11月)に発行されます。学内では全教職員、学院役職者に、学外ではおもにキリスト教学校教育同盟加盟校、他校の資料室に配布・郵送されています。同窓生には、基本的に60歳以上の希望者に毎号郵送されていますが、定期講読をご希望の場合は①お名前②住所③電話番号④卒業した部/卒業年を史料室までお知らせください。

#### 🌸 既刊の「史料室だより」もホームページでお読みになれます

「史料室だより」は全号、学院ホームページで閲覧できます。「東洋英和 史料室だより」で検索、または下記のURLよりアクセスしてください。東洋英和の歴史が満載です。

URL: <https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/>

#### 🌸 資料ご寄贈のお願い

史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあってご不要のものがございましたら、ご寄贈いただけると幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

#### 【お問い合わせ先】 東洋英和女学院史料室

〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40  
Tel 03-3583-3166 (直通) Fax 03-3583-3329  
E-mail [archive@toyoeiwa.ac.jp](mailto:archive@toyoeiwa.ac.jp)

#### 🌸 2022年度 史料室委員会委員

委員長	平体 由美 (大学)
大 学	野田 潤 町田 小織
中 高 部	神藤 真理 町島 由美子
小 学 部	地主 武史
幼 稚 園	菅原 陽子
かえで幼稚園	大漣 知子
法人事務局史料室	松本 郁子 三笠 知世